

1. 作品

クロード・モネ
《睡蓮—柳の反映》

油彩・カンヴァス 199.3×424.4 cm (上部欠失) 1916年

左下に署名・年記: *Claude Monet 1916*





2. 松方コレクション

松方コレクションとは、川崎造船所（現在、川崎重工業株式会社）の初代社長をつとめた松方幸次郎（慶応元/1866–1950）が、第一次世界大戦を背景としたヨーロッパの船舶特需によって事業を拡大しつつ、1910年代半ばから1920年代半ばにかけて築き上げたコレクションである。国立西洋美術館は、戦時下の接收を経てフランス政府から日本政府へ寄贈された松方コレクションを展示公開するため、1959年に東京・上野の地に創設された。

松方の収集活動はロンドンに滞在した1916年頃に開始された後、パリやベルリンなどに展開され、昭和恐慌のあおりで造船所が経営難に陥る1927年頃にいたるまで、総点数1万点を超える美術品が集められた。そのうちパリの宝石商ヴェヴェールから買い取られた浮世絵約8000点は、宮内省（現宮内庁）を経て現在、東京国立博物館に収蔵されている。

だが、日本に美術館（「共楽美術館」）を建設すべく買い集められていた西洋の絵画や彫刻、装飾芸術品は、流転の運命をたどった。1928年以降、日本へ到着していた1000点を超える作品群は次々と売却されて散逸するとともに、ロンドンに残されていた作品群は1939年の倉庫火災で焼失するという不運に見舞われる。なお、長らく不明であったその焼失作品の内訳は、イギリス美術を中心に約300件（約950点）あったことが近年明らかになった。

一方、フランスに残されていた約 400 点の作品群は、第二次世界大戦末期に敵国人財産としてフランス政府に接収され、戦後、サンフランシスコ平和条約によって同国政府に処分権が渡された。その後、日仏政府間の交渉を経て、最終的には、1958 年に日本政府への松方コレクションの寄贈が決定され、フランスの国立美術館のために留め置かれる作品約 20 点を除いた 375 点が、翌 1959 年、日本へ運ばれ、設立されたばかりの国立西洋美術館に収蔵されるにいたった。

今回松方家から寄贈されたモネの破損作品は、初期の記録から存在は知られていたものだが、戦後の松方コレクション返還交渉のなかで、おそらくは戦争疎開時の保存環境の悪さに起因する破損状態の甚だしさから、フランスの国立美術館のために取置かれるべき作品リストにも、フランス政府から日本政府へ引渡される作品リストにも含まれずに取り残され、忘れ去られてしまったと考えられている。

【関連略年表】

1944 年 12 月	フランス政府による松方コレクションの接収
1952 年 4 月	サンフランシスコ講和条約発効
1955 年 9 月	日仏政府間における公文の交換
1958 年 12 月	「美術作品の所有権を日本国へ移転することを許可する命令」の公布
1959 年 6 月	国立西洋美術館開館

3. 《睡蓮—柳の反映》

現在、パリのオランジュリー美術館に設置されているクロード・モネの「睡蓮」の大装飾画は、印象派の画家モネの芸術の集大成とされる。楕円形の 2 つの展示室の壁に縦 200 cm、横 600~1700 cm の 22 枚のキャンバスからなる 8 点の作品が 4 点ずつ、鑑賞者を取り巻くようにぐるりと設置され、全長 90 m に及ぶ大作として知られる。

今回、国立西洋美術館に寄贈されたモネの破損作品は、この大装飾画の中の《木々の反映》（200×850 cm）に関連づけられている作品のうちの一つで、戦後、長らく所在不明とされてきた《睡蓮—柳の反映》（下図）である。

いずれの作品も、柳の木が上から下にさかさまに映りこんでいる睡蓮の池の水面を荒々しい筆触で描いたもので、他には、マルモッタン美術館（200×200 cm）やメトロポリタン美術館（130×200 cm）のほか、本作により近い構図の習作が北九州市立美術館（1916–1919 年、130.0×197.7 cm）と地中美術館（香川県直島町）（100×200 cm）に所蔵されている。



画像提供：The Wildenstein Plattner Institute, Inc.

モネは大装飾画のために多数の作品を描いたが、画家は生前これらを売りがらないばかりか、気に入らない作品は破棄したともいわれる。松方コレクションにはこの大装飾画へと結実していく作品が2点含まれていたが、それらは松方が1921年にモネのアトリエを訪ねて画家から直接購入したのものとしてきわめて貴重な例であった。そのうちの1点は、当館の常設展示の中心である《睡蓮》（200×200 cm）であり、もう1点がこの破損作品である。

本作を含め、松方が1920年代初頭にパリを中心として収集した作品群は、購入の仲介者となっていたレオンス・ベネディットが館長をつとめたロダン美術館に預けられ、そのまま第二次世界大戦を迎えた。戦時中、これらの作品群は管理を任されていた日置釘三郎^{ひおきこうざぶろう}によってパリ北西部の村アボンダンへ疎開させられているが、おそらくこの時期に劣悪な保管環境に置かれて現状につながる損傷を受けたことが推測される。

本作のオリジナルのサイズは関連作品のなかでもひと際大きく、《木々の反映》を構成する2つのパネルそれぞれのサイズ、200×425 cmに等しいものであった。現在はおそらく湿気もしくは水の被害によって支持体の上半分を欠失し、木枠も失われ、絵具の残存部は全体の半分にすぎず、今後、きわめて慎重な修復が必要とされる。だが、残された画面のみでも相当の面積があり、適切な処置がなされれば、モネ作品の魅力を伝える可能性をまだ十分に持っている。また幸いにも、画家のサインと「1916年」の年記のある左下の画面が残されており、大装飾画の制作プロセスを考えるうえでも意義のある作品となりうるだろう。

現在、修復と展示のための予備調査を進めており、外部の専門家の意見も交えて今後の計画を練りつつ、次年度から修復処置を開始する予定である。また、一連の基礎調査・修復処置を終えたうえで、2019年6月に始まる当館の開館60周年記念の松方コレクション展において展示公開を予定している。